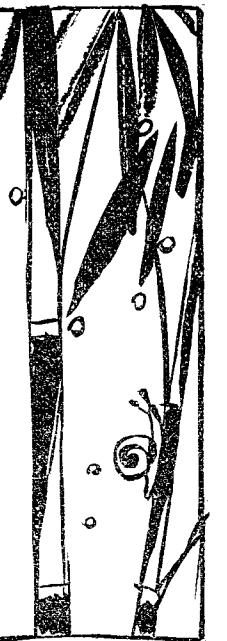


つて居ります。先生の御手紙も私のと同じように八通まるつて居ります。その中に戀といふことは少しも書いてゐらつしやいませんけれど、あんまりお手紙でやさしいのが、今になつて却つてつらうございます。戀になりましたのを怨みがましく申したのも私が考へが足りなかつたのでござります。先生の方にさういふことがあらうとは知りませんでしたから、しかし先生がさういふ方と仲よくなさいましても、私が考へが足りませんので、不思議さうに、

「お母さん、お前どうおした」



## 小説 曇り日

### 水野仙子

髪の後れ毛を搔きあげる氣力もなく、頬れた島田の重さがいよいよ早子の氣を沈ませた。それをぢいつと見まもつて居るやうな夫の態度が、また早子には又となく寂しいのであつた。新しい箇笥の上に置かれた鏡の面に、窓の外の林の綠りが映つて、稍々毒褪めて視く早子の頬は、この日頃の疑惑にやつれて見えた。

『どうかしたのかい?』  
時たま夫はかう言つて訊く。

『いいえ。』

『あれだ!』と思ふやうな目付きを感じながらも早子は猶かう答へる。

『ちやあ體でもわるいのかい?』

『いいえ。』

煙草の煙りが輪になつてのぼる。

『なんか不平があるならはつきりさう言つて、しまつたらいいぢやないか。さつぱりするよ。』

『……』

それともこんな貧乏世帯は厭だつていふのか……そ

つて、たづねてくれました。さうしたら、私はほの事ならなくなつて、またそこへ泣き伏しました。今まで先生からのお手紙は一度も人に見せないで、大事にしまつて置きましたのですけれど、そのお手紙を、母のまへ投げ出して、今までのことを母に話して聞かせました。さうしましたら、母も私に同情してくれました。そして母も勿論先生をおわるく思つてやるません。……私はこのまゝ手紙の往復を絶つことはまだ、どうしても出来ません。

△△△△先生

下村さよ

二月二十五日

けれども早子は僅かに唇を動かすに過ぎなかつた。

重ねては間はぬ夫が、『どうしたつてひふんだらう! こんなぐじくした女ぢやなかつた筈だ!』といふやうに黙つてしまふと、早子はまたそれが悲しくなつてかすかに唇がふるへて来る。そしては強いて優しく聞うて呉れない怨みに、ます／＼意古地に心が固くなつて行く。暫くすると、

『ね、何か僕に不平でもあるの?』

『いいえ。』

『あれだ!』と思ふやうな目付きを感じながらも早子は猶かう答へる。

『ちやあ體でもわるいのかい?』

『なんか不平があるならはつきりさう言つて、しまつたらいいぢやないか。さつぱりするよ。』

『……』

れならそれで今うちならまだどうにでもなるから  
に快くなりもしないうちに一緒になつたのが間違ひな  
んだよ。さうは思つたんだけれど夫の顔も青褪めて居た。神經がその削げた頬をひき  
しめて居る。

『泣いてるのかい？』  
搔き撈られるやうな不愉快に曇つた聲が、早子の心  
にびり／＼と響いた。すると新しい涙が熱く瞼を溢  
た。

つと立つて行つた夫の足音が書齋にはいると、張り  
のぬけた心に湧きあかる悲しさが、後から／＼と綴り  
あげる聲を洩した。涙が、夫の驚きをも憐愍の情をも  
そり得なかつたことがます／＼果敢なまれた。

『もうどうせ！　もうどうせ！』  
と聲を胸の奥に絞つて、悲しい詠めの氣分に涙を納め  
ようとするけれど、さうすればするほど、吾身を感れ  
むの思ひが止めどもなく堰きあげて來て泣けば泣くほど涙は涙を喜んで流れた。

『おやすみなさい。』  
かう言つて早子は、脱ぎ捨てをたゞみ、青い蚊帳の  
裾を捌いて異つた部屋の一つの寝床にはいつて行く。  
薄目に灯した洋燈の光りに、寝返りを打つ白い寝巻が  
女暗い目色から、日蔭のやうな空氣に浸されて居る。  
茶の間の窓の外に續く植林が、若やいだ縁りに朝の  
氣を吸つて、午後となれば日影がその枝の搖ぎを障子  
樂しい、新しいものを待つ怡びの心から借りた家も、  
病み上りの主人の褪せた唇の色が、愉悦の影を潜めた  
蚊帳の中に時々動いた。

ちろ／＼ちろ／＼と林の中に虫が鳴く。  
探り合ふやうな心の一つが、やがて微かな寝息にな  
つて行くと、早子は急に心の張りが弛んで、深い溜息  
と共に自分も眠りに落ちようと強いて口をつぶつて見  
る。

——幻影のやうに動く女の形ちがあつた。その姿は  
美しかつた。それが曾て見た人のやうでもあれば、見  
究めようとすればまたその顔は目鼻のない、ぼんやり  
また筆を擱かんとしては、彼を思ひ是を思ひて、この身は無限の幸ひのうちに溶け入る如き、心地のいたされ候。

強く痛く胸を衝いた言葉の節々が、三尋にあまるやうな卷紙に運んで行つた美しい手蹟が、浮彫のやうに早子の目に浮んだ。さま／＼な想像はそれからそれへ續いて、いよいよ牙えて行く頭に虫の音がディエイエと響く。

『七日の夜十二時を過ぎて、様々の雜念をはらひ退け  
を亡き夫に捧ぐる微志といだし、第七回忌の法要  
を快く済ませてのち、悦んで、別れを告げ申したく、  
その時より初めて再び身心共に獨身の身と相成り申  
すべく、新しさ生活は如何にして五年の後ならでは  
は營み難く候。』  
『七日の夜十二時を過ぎて、様々の雜念をはらひ退け  
凡そ三十分ほどもたゞ諾か否かに就いてのみ考へ居  
り候。その折、貴方ともそれとも定かならねど、た  
しかに併しその人の我が前に現はれて、暫し立盡し  
居り候。それをちいつと見て居り候ほどに、いつか  
その人は高さ／＼美しい塔に變りゆき候。しかると  
ころにまた一人の人の現はれて、登れよ！　とばか  
り私を導いてその美しさ塔に登りゆき候。そは夢に  
てもなく、また現にてもなく、見えしが如く感じられ  
しが如き一つ幻覺にて御座候へし。私の心は躊躇  
もなく諾と定め申し候。』  
『静かなる静かなる夜に候。書きつゝ涙をぬぐひ、今

さへ済してしまへば、あとはゆつくり看護をさせることが出来るからといふ、譯のわかつた早子の伯父の言葉に従つて、日比谷の廣間に座つた夫の顔は青かつた。その華かであるべき筈の、新しい生涯の最初の日が、そのやうな寂しい氣分で彩られたばかりでなく、勝れない氣分がさせる不機嫌からは知れないが、戀しい人であつた時代には見せなかつたやうな我儘を露はにして手を一つ取つて二人がかうなつたのを喜んで呉れようともしないのを早子は物足りなく思つた。

初め自分から殊勝らしく言ひ出して、女中もなるべくは使はないことに決めたので、朝は僅かな物音にも直ぐに目が開いた。粥を煮たり乳を沸かしたりするごとに随分間が取れた。そして出来損ねたり煮えこぼれたりした時に、一寸でも厭な顔をされるのが早子には怨めしかつた。

電車に乗つて病院まで薬を取りに行くには、どうしても丸半日を潰さなければならなかつた。薄暗くなつた臺所に、かちくと皿の音などするのは吾ながら寂しかつた。雨戸をさしに縁側に立つた時など、手水鉢の上にふらくと搖れる手拭ひの風が、初秋らしい

ひやくした氣を運んで、遙かに黒く蟠つて居る高見の上にちらり瞬く街の灯などを見ると、こみあげるやうに昔懐しさの思ひが湧いた。伯父が道具屋から真直ぐに運ばせた早子の簞笥が来た日、その新しい木の匂ひに久しづりの嬉しさをそぞらす引出しで早子は夫のティブルを整理する氣になつた。折れた端書の一枚も一包みの薬の残りも、一人の人の生活の断片であることが面白かつた。早子は何氣なく一つの新聞紙包みを開いて見た。それを引出しに手を掛けた。下宿から此家へ運んで来る時は、何も彼も詰め込んだまゝになつて居るのを、残らず引出して早子は一々珍しさうに撰り分けて行つた。折れた端書の一包みの薬の残りも、一人の人の時ふと何やら不安な氣が萌したのであつたが、無造作にくるまれた一束の手紙がそこに広げられた時、早子は思はず力の萎えたやうな兩肢を支へかねて椅子に腰を下した。さうまて親しくはなかつた筈の人の手紙ばかりが、そんなに澤山一纏めにしてあるといふことが、直ぐに早子にあるものを感じさせた。鼓動の激しくなつた胸の反比例には、豫期して居たことを認める

やうな微かな微笑みもその顔に泛んだ。

二人が散歩から歸つたあとに書いた手紙もあつた。男の留守にその下宿の縁に腰をかけて待ちながら書いた鉛筆の走り書きもあつた。返事のないのを待ち兼ねて出した手紙やら、贈り物に添へた手紙やらの中に、男が戀を明かしたその前後の手紙を見あてた時、早子は鐵槌に打たれたのであるかのやうな響きをその頭に経験した。豫期は豫期でも、それは男の口吻によつて察して居たやうな、女の片戀であるべき筈の豫期であつた。それなのにその幾通かの女の手紙はみな、男から打明けた戀に燃える返しの言葉なのであつた。

早子は胸の痛たさに堪えられなくなつて、そのまゝ頭に間もなくかへつた。熱を病んだあととのやうな疲労が、思ふ通りな運動を四肢に拒んで、すべての神經は劃かれたその問題に就いてのみ働いた。強い大きな刺

激に縮萎んだ判断力は、自づとその力を回復して来てやがて幾倍もくの廣さのうちにすべてを包んでしまつた。

恐しいほど顔の筋肉の引き締つた、そして血潮の流れを阻んだやうな色の頬と唇を、夫はその日病院から歸つて來て早子の顔に見たのであつた。

早子のものと言はない日が一週間も續いた。それはほんとに暗い日なのであつた。

『なんだい？』  
『貴方ねえ。』

或日早子は、黙つて起つて行く夫のあとに隨いて書齋にはいつた。そして椅子に腰を下したその後から、夫の肩のあたりをいちりながらもぢりとして何事かを言ひ淀んで居た。

『なんだい？』  
何かを豫覺したやうに、夫は振り向きもしずに沈んだ聲でかう言つて腕を組んだ。

二人は暫く無言のままに相對して居た。

「あのねえ……」  
「ひょ。」

『貴方ほんとうに私と結婚なさるお積りなんでした  
の?』

『不笑しなことを聞くね、もう式を挙げてしまつたぢ  
やないか?』

『だつて……だつて……』

『早子は涙ぐんで居た。  
何故そんなことをいふの?』

『静に夫は椅子を廻して早子と向ひ合つた。あれもこ  
れもと言ひたいことが澤山あるけれど、どう言ひ出し  
たものかと懸念心に、何やら怨めしさも手傳つて、早  
子は歩々返辭も出來なかつた。』

『ね、何故そんなことを聞くんだい?』

『……』

『なんかつまらないものを見たんだらう?』

『早子は思はずびくりとしたが、黙つて合點／＼をし  
た。』

『多分さうだらうと思つてた。』と夫はそれで少し元氣

を得たやうにはつきり言つて、  
『何も心配するやうなことはないんだよ。ね。どうし  
たつていふの?』と珍しく優しく早子の手を取つた。  
『私ねえ。』

『あゝ。』

『それで?』  
『Sのをかい?』

『……手紙を見たの。』

『早子は黙つて首を下げた。

『あの中に五年問題つていふのがあるでせう。』

『あゝ。』

『あれはどうなすつたの? あの……貴方約束を反古  
になすつたんだやないんでせうね。』

『馬鹿をお言ひよ。僕がそんな男と思つてゐるのかい?』

『あれはなんでもないんだよ、そのまゝになつてしまつ  
てるんだよ。ね、なんでもないあれつまりのことなん  
だよ。』

『……』

『まだ疑つてるの?』

『それだつて、もしもあなたがほんとに待つてらつし  
やるんだと……』

『馬鹿だね、あの女はもうとつくにお嫁入りをしてら  
あね。』

『ほんとう?』

『あゝ。早子は目を瞑つて何事かを讀まうとするやう  
に疑ひと夫の顔に見入つた。』

『過去のことぢやないか、ねえ、今まで黙つてたのは  
僕が悪いけれど、併し遠からずそのことは早ちやんに  
も話しようと思つてたんだ。それが遅かつた爲めにこ  
んな……何かい、それで毎日／＼あんなつまらない顔  
ばかりしてたのかい?』

『早子はまた黙つて肯いた。  
『馬鹿だね、でも僕も悪るかつた、早くさう言つて置  
けばよかつたんだのに、つい臆病だつたものだから……  
それつていふのも、結婚前にそんなことを言つたら  
早ちやんが僕から外れて行きはしないかと怖れたもの  
だから……。』

『勘忍おし、ね、勘忍おしよ。』

優しいその言葉と、脊なを撫てる掌の暖かさが感じ  
られるると、早子は益々しゃくりあげて、心行くばかり  
の涙を夫の膝の上にそいだ。そしていつまでも／＼  
そのまゝの姿勢を動かさうとはしなかつた。(完)